

## 海保青陵の経済思想

青柳淳子

### はじめに

海保青陵は宝暦 5(1755)年、丹後宮津藩の江戸詰め家老、角田青溪の長子として江戸で生まれた。青年期を「田沼時代」に過ごし、18世紀後半から19世紀にかけて活躍した江戸時代の経世家として知られている人物である。

この時代、田沼意次は大坂を中心とする多くの商工業者に対して株仲間を公認し、彼らの営業権を保護する一方で運上金や冥加金を徴収し、農業生産物以外からの財源確保を模索した。各藩においては、公儀からの経済的自立と財政改善を目的として、藩の専売制を採用し、藩と藩との間で積極的に商業取引が行なわれた<sup>1</sup>。

他藩から「富」を獲得することを目的とする「産物マワシ」は、海保青陵が提唱した藩を主体とする富国策であるが、彼の提唱する経済策は、生産物の増産、港湾の整備から農民や下級武士の内職奨励など多岐にわたっている。

国益の増大こそ経世策の要であると考えた海保青陵の経済策は、自身の知力で導いた「理」によって説明される。貨幣経済が進展し、経済力の差と身分の序列が交錯、逆転するような社会の変化を、海保青陵は「世ノ移変」と捉えていた。青陵にとって、現実の社会を客観的に捉える事ができる人こそが「賢」なのであり、たとえ武士であっても経済活動を蔑視する者、机上の空論しか説くことができない儒者、つまり事物を客観的に認識し、その背後にある「理」を認識できない者が「愚民」となる。海保青陵の眼に映ったのは、「世ノ移変」が起こる現実を客観的に把握し、経済社会で活躍する「賢」なる三民の姿であった<sup>2</sup>。そして、青陵は、人間は誰しも利己心を持っていると認識していた。人間の利己心を経済活動へ向かわせることを説いた海保青陵は、きわめて注目す

---

<sup>1</sup> 田沼期の経済社会状況については、中井信彦『転換期幕藩体制の研究』（塙書房、1971年）を参照、江戸時代の経済史的背景については、杉山伸也『日本経済史』（岩波書店、2012年）、石井寛治『日本経済史[第2版]』（東京大学出版会、2009[初版1976]年）、などに依拠した。

<sup>2</sup> 青柳淳子「海保青陵における「民」と「智」—青陵思想の愚民観をめぐって—」（『日本経済思想史研究』第8号、2008年）。

べき経世家であろう。海保青陵が、身分社会と拡大する商品貨幣経済の両面に目を配りながら、いかなる経済社会を理想としていたのか。海保青陵の経済思想について考察する。

## 1. 経済社会の現状認識

海保青陵が見た社会の現実には、以下のようなものであった。社会全体の生活水準が上がるに従って農・工・商三民の暮らしぶりもぜいたくになり、支出が増加している。三民の支出が多くなり、奢侈の風潮が進んだとしても、彼らは智恵を働かせて収入を増やし、それに応じて可処分所得も増加しているので、それは理屈にかなうものである。一方武士の収入は、徳川家康の頃に定められた石高のまま増加しないというのが通常であり、収入は停滞した状態である。それにもかかわらず、武士の生活も奢侈に流れれば、借財だけが増え続けて家計や藩財政が行き詰まることは当然のことである<sup>3</sup>。

また、経済が停滞するのは社会のシステムが現状に合っていないからであると青陵は見ていた。たとえば加賀藩について、戦国時代から続く津留を慣行していることを指摘する。津留は本来、移出入ともに禁じるものであったが、現在は移出を禁じることのみ残り、移入を禁じる法は消滅している。今は戦乱の時代ではなく平和な社会であり、他国の物を買うばかりで他国へ金銀が流出する状態では経済が「片ツリ」になっているというのである<sup>4</sup>。今は戦国の世が終わって二百余年経ち平和な社会である。つまり、今は乱世の攻伐ではなく、いかに多くの富を手に入れるか否かを争う時代であると青陵は捉えていた<sup>5</sup>。このような時代において、経済の課題を克服することが第一である、「国ヲ富マスガ治国ノ始マリ也<sup>6</sup>」と海保青陵は考えたのである。

また 18 世紀後半は、対外関係が次第にクローズアップされる時期でもあった。1778（安永 7）年、ロシア船が蝦夷地に入港し、松前藩に通商を求めた。その後寛政 4 年（1792）年、漂流民を護送してロシア使節ラクスマンが根室に来

---

<sup>3</sup> 「稽古談」（蔵並省自編『海保青陵全集』所収、雄山閣出版 1990 年、以下『全集』と略す。）、p.60。

<sup>4</sup> 「陰陽談」『全集』 p.263。

<sup>5</sup> 「稽古談」『全集』 p.69。

<sup>6</sup> 「本富談」『全集』 p.115。

航し、松前藩に通商を求めた。当初、対外危機といえどもっぱらロシア問題であったが、北方ロシア領と広東を結ぶ航路が開かれ、イギリスが毛皮貿易に携わるようになると、日本に渡来する英船も出現するようになる。寛政8年、イギリス人のブロートンが海図作成のために室蘭に来航、翌年にかけて日本近海を測量している。さらに、フランス革命の影響が東アジアにも及ぶようになると、日本もイギリスに対する警戒を余儀なくされることになる<sup>7</sup>。江戸の蘭学系知識人たちの中にも対外関係を論じるものは多く<sup>8</sup>、鎖国と外交問題は知識人たちのあいだでも注目の話題であった。こうした中、海保青陵は公儀に対する言及はしないという立場を明確にし、非常に慎重な態度をとっている。しかし、青陵も中国や朝鮮、ロシアを「隣国」として認識し、意識を向けていたであろうことはその著述から知ることができる<sup>9</sup>。

## 2. 富国策とその目的

海保青陵は多くの富国策を論じているが、彼が捉えていた富とは何であったのだろうか。海保青陵は、「自国ノシロモノ、沢山ニ出来ルヨフニスル事、富国第一義也。<sup>10</sup>」と述べている。つまり、財となるシロモノ＝商品を多く産出することが富国策の第一であるという。そして、ただ財を産出するだけではなく、そこからさらに財を増やすこと、利息を得ることが「天地ノ理」とであると把握した。青陵は、田から米を産出することも、山から木材を産出することも、海から海産物や塩を得ることも、すべては金から利息を生む事と同じであると説明している<sup>11</sup>。

海保青陵は、政治の出発点は「国益」であり<sup>12</sup>、藩内に財を蓄えた「富家」が多いほど、「国ノ益」になるのだと考えていた<sup>13</sup>。「シロモノ」を多く産出し、その利益が三民のものになろうとも、為政者である武士のものとなろうともそ

<sup>7</sup> この時代の海外状況については、沼田次郎、松村明、佐藤昌介校注『洋学 上』日本思想大系 64（岩波書店、1976年）を参照した。

<sup>8</sup> 杉田玄白、大槻玄沢、司馬江漢なども対外関係に言及している。林子平が、公儀に海防の必要性を述べて処分されたことは広く知られることである。

<sup>9</sup> 「養心談」『全集』p.419。

<sup>10</sup> 「綱目駁談」『全集』p.225。

<sup>11</sup> 「稽古談」『全集』pp.7-8。

<sup>12</sup> 「養蘆談」『全集』p.215。

<sup>13</sup> 「稽古談」『全集』p.20。

れはどちらでも構わず、とにかく藩全体の財を多く産出すること、いわば GNP の増大が「富国ノ計策」であるというのである<sup>14</sup>。国内の民一士農工商すべての人びと一が一体となって、自国の産物を他国へ売って、他国からより多くの金を得ることは、士農工商すべての経済にとって利点の多いものであると青陵は述べている<sup>15</sup>。国全体の利益増大を目的とする海保青陵の論じた富国策は、「上下トモニクルシムコトノナキ」社会を目指すものであった。

国益増大のために海保青陵が論じた経済政策は、瀬戸物の生産、薬草や材木の産出、酒の製造、塩田の開発などバラエティに富んでいる。彼の代表的な経済策「産物マワシ」は、藩が主体となって国産の「シロモノ」を他藩へ売り、「他国ノ金ヲ吸取ル」ための「機密」の富国策であり、青陵はそのために港の重要性を述べている<sup>16</sup>。たとえば、長州藩や加賀藩は軍法にならって、人や物が他藩との通行を妨害するような制度を用いているが、長州の下ノ関や加賀の鈴ノ岬の港を、大規模交易の仕様に整備をすれば、大津や兵庫以上に繁栄すると述べている<sup>17</sup>。こうしたインフラ整備には当然莫大な資金が必要となるが、資金調達には米切手や空米、米札の発行など、米相場を通じて資金を得ることを提唱している<sup>18</sup>。

武士も三民も、人は利己心に基づいて行動するものであり、欲心によって高い生活水準を求めていくものである。「世ノ移変」が生じている社会において、もはや「愚民」ではなく知恵をもった三民を統治するための富国策は、「上下トモニクルシムコトノナキ」、武士にも三民にも良い社会でなければならなかった。それを実現するために法や規則で強制しても三民は従わない。また、高德の君主であったとしても、人は君主に従うのではなく、「理」にこそ従うのである<sup>19</sup>。したがって、富国策を含めた「天下中ノ仕掛」は「理」に適うものでなければならぬのである<sup>20</sup>。青陵思想における「理」とは、朱子学の教える、万物に内在する普遍かつ不変の思弁的な理ではなく、蘭学の考え方に影響を受けた数

---

<sup>14</sup> 「稽古談」『全集』 p.11。

<sup>15</sup> 「稽古談」『全集』 p.92-93。

<sup>16</sup> 「経済話」『全集』 p.325。

<sup>17</sup> 「待豪談」『全集』 p.973。

<sup>18</sup> 「新墾談」『全集』 p.299。

<sup>19</sup> 「天王談」『全集』 pp.503-510。

<sup>20</sup> 「稽古談」『全集』 p.13。

理的に捉える「理」＝「サナケレバナラヌスジ」であるが、この点については別稿で論じたいと考えている。

### 3. 経済構想と武士の商人化

海保青陵は支配階級である武士の商人化を最もラディカルに論じた人物であった。「上下トモニクルシムコトノナキ」社会のために青陵が提唱した富国策のひとつは、藩内の「シロモノ」を藩がまとめて買上げ、藩が主体となって他藩と交易をする「産物マワシ」であった<sup>21</sup>。しかし、現実の社会で武士が商売を営むこと、武士が利益に執着することは否定されがちである。藩が主体となっておこなう商売、すなわち武士が商売を行うことを阻んだのは、「武士は商売をするものではない」という妄信であると青陵は捉えた。武士が商売に携わることを否定する原因は、物事を客観的に捉えることができない、「理」を認識する能力が欠如しているからである。そもそも、武士は主君から米を与えられ、その米を売って金に換え、その金で物を買っている。すでに米を「売って」いるのである。武士が「金ヲ町家ヨリ借テ、返サヌ」ことこそ「大恥辱」であり、すでに売買を行っているにもかかわらず、物売ることを恥じるというのは了見違いも甚だしい、「物ヲ売テ物ヲ買ハ、世界ノ理」であると青陵は力説するのである<sup>22</sup>。客観的に物事を観察できない、すなわち「理」を認識できない儒者や武士に対して、青陵な容赦のない批判を浴びせている<sup>23</sup>。

「世ノ移変」が生じる社会において、青陵は支配者である武士に対して、経済社会のトップに立つ商人のように「ウリカイ」の「理」を認識できる知性を身に付け、支配者として経済を主導しなければならないと鼓舞した。士農工商すべての人にとって良い状態、現在の経済学でいえば、パレート効率性が達成される社会を実現するために、専制的に民を支配するのではなく、人間の利己心にうったえて、「理」によって治めていくことが海保青陵の目指す経済社会であったといえる。

---

<sup>21</sup> 「稽古談」『全集』 pp.92-93、「綱目駁談」『全集』 p.225。

<sup>22</sup> 「稽古談」『全集』 p.22。

<sup>23</sup> たとえば、「稽古談」『全集』 p.22、p.26 など。

## おわりに

先行研究では、海保青陵の思想に内在する経済合理性を評価しつつも、彼の経済策が最終的には身分制と結びついた思想であると捉え、そこが青陵思想の限界であると結論付けるものが多い。海保青陵が、三民の主導する社会を描けなかったこと、彼の交易論が海外に及んでいないことを指摘し、そうした点が彼の思想的限界であるというのである<sup>24</sup>。確かに、海保青陵が農工商三民の主導する社会を想定することはなかった。彼の提唱する「産物マワシ」も、藩対藩の交易論にとどまるものであり、海外貿易を論じてはいない。しかし、「海保青陵が論じていない」ことを根拠にして、それが青陵思想の限界であると結果付けることは果たして正しい理解といえるであろうか。

豪商や豪農といわれる経済力をつけた三民が登場しても、経済規模の面からみればその財力は藩の規模におよぶものではない。海保青陵は「産物マワシ」のための港湾整備を提唱したが、社会基盤の整備には莫大な費用が必要になる。そうした費用は、三民だけの財力で賄いきれるものではなく、やはり藩単位の資金を活用することが有効的であると海保青陵は考えたのである。青陵が、御三家のひとつ、尾張藩の藩儒という高いステイタスを自ら放棄し、あえて「自由自在ノ身」を選択したことからも明らかなように、彼は武士への執着が強かったわけではない。青陵が武士主導の社会を想定したのは、青陵思想が身分制と結びついていたからではなく、経済社会を客観的に観察した結果、武士が主導する社会がもっとも「理」に適っていると判断したのである。しかし、物事の「理」を理解できない、経済感覚に疎い従来の武士では「世ノ移変」が生じている経済社会を主導することはできない。したがって、「上下トモニクルシムコトノナキ」社会を目指すため、海保青陵は経済社会を主導するべき武士に対して、「理」を理解できる賢者になれと「鼓舞」し続けたのである。

---

<sup>24</sup> 海保青陵の先行研究に関しては、前掲、青柳 2008 年を参照のこと。